

【2年次研究】

学び合いを引き起こすICT活用 ～国語科「話すこと・聞くこと」の領域におけるスピーチの指導を通して～

村山市立楯岡小学校 齋藤 愛美

<研究の概要>

本研究では、ICTを活用したスピーチの指導について考察した。スピーチメモの作成、スライド資料の作成、スピーチ練習と、それぞれの過程で国語科としてのねらいを達成するためのICTの活用について実践を行い、その効果を検証した。その結果、スピーチメモの作成では、印刷した文字と手書きの文字が組み合わさることで、児童の思考が見えやすくなった。また、スライド資料の作成では、児童が情報をしぼったスライドの良さに気づくことで、一度作ったスライドを納得しながら修正する様子が見られた。加えて、本研究ではICTが児童の学び合う学習場面をさらに引き起こすことをねらいとしている。1人1台端末が個人の効率的な学習にとどまらず、思考させる道具となるためには、友達との学び合いが必要であることが明らかとなった。

1 研究テーマ

1年次は、国語科「話すこと・聞くこと」の学習を通して、「上達を実感し、主体的により良い表現を目指すICT活用」をテーマに、国語科「話すこと・聞くこと」の領域で研究を行った。「話すこと・聞くこと」の学習は、音声言語というすぐに消えてしまう言語を扱うため指導が難しい。そこでICTを活用して、音声言語を自動で文字化することで、児童は話し合いの内容を客観視しながら学習をふり返ることができた。

2年次は、国語科「話すこと・聞くこと」の領域におけるICTを活用したスピーチの指導をテーマに実践を行う。今年度から1人1台の端末が整備され、スライド資料を使ったスピーチは、他教科や他学年でも気軽に行われるようになった。一方で、スライド資料の作成について具体的な指導を行う機会は少ない。スピーチを手助けするための効果的なスライド資料を作成し、適切に活用できるよう国語科としての学びを焦点化し、力を付けていきたい。

合わせて、1年次の実践では、グループで一つの学習者用コンピュータを使用し、文字化された資料を互いに見合うことで、気づいたことを伝え学び合う姿が見られた。ICTを活用す

ることで、自分たちの活動をふり返り、気づきや友達の良さを伝え合うような「学び合いを引き起こすICT活用」の場面を、2年次も目指していく。

2 研究の視点

- (1)他教科にも生かせる効果的なスピーチの指導
- (2)学び合いを引き起こすICT活用

3 研究の方法と計画

(1)視点1について

効果的なスピーチに必要な、スピーチメモとスライド資料の作成について考察していく。スピーチメモは、内容の加除訂正がしやすいよう Google ドキュメントを使用して作成する。発表原稿ではなく、あくまでもメモとして、話し手を手助けするものになるようにしていく。また、スライド資料を作成する際には、情報をしぼったスライドを意識させていく。

スピーチをする際には、原稿を読んだり、全て暗記して発表したりといった一方的な活動でなく、聞き手の様子を伺いながら発表する姿を目指していく。

(2)視点2について

学習で学び合いを引き起こすために、「より良いスピーチにするためには、どうすればよいか」という課題意識をもたせる。より良いスピーチにするため、グループ内で気づいたことを伝え合うことで、上達していく学び合いができるだろう。

加えて、ICTを使って、消えてしまう音声の記録を残していく。本単元の活動はスピーチであるため、音声の他、身振りや目線、資料の使い方などにも着目できるよう動画を使用する。ICTを使った記録があることで、話し手も自分を客観視することができる。また、ただ動画を流し見るのではなく、グループの友達の気づきが、動画を見る視点となっていくだろう。

ICTの記録があることや、見る視点をもって動画をふり返ることで、上達に結び付く学び合いになると考える。

4 研究の実践

(1)実践1

ア 実践の概要

(ア)単元名 第6学年 国語科

資料を使って、効果的なスピーチをしよう。

「今、私は、ぼくは」(光村図書)

(イ)本時の目標

動画やグループのアドバイスをもとに、スピーチをふり返ることを通して、自分の考えが伝わるように表現を工夫したスピーチをしている。

(思考・判断・表現)

(ウ)ICTの活用について

①スピーチメモ、スライド資料を作成するため、それぞれ、Googleドキュメントとスライド機能を使用する。

【視点①】

②スピーチの様子を動画として記録する。それをを用いて自分を客観的にふり返ったり、グループでアドバイスし合ったりする。

【視点②】

イ 児童の学びの姿

【視点①】他教科にも生かせる効果的なスピーチの指導

スピーチメモ作成 (Googleドキュメント)

《指導の工夫》

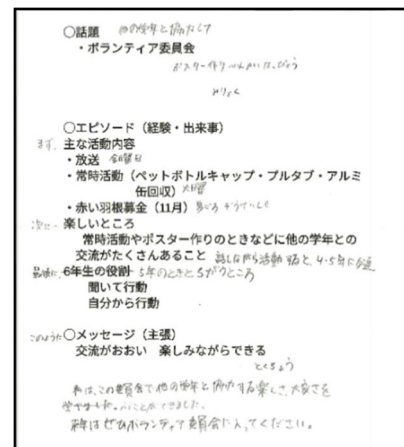
- ・スピーチのおおまかな構成を伝える。

- | |
|-----------------|
| ①話題 |
| ②エピソード (経験や出来事) |
| ③メッセージ (主張) |

- ・箇条書きで書かせる。
- ・発表時間を伝えることで、何をどのくらい話すかの目安にさせる。(1~2分)
- ・順序を入れ替えたり、特に伝えたいものだけを残したりして構成を考えさせる。

《児童の様子》

- ・順序の入れ替えや文の削除などの必要もあり、書くよりも、文字を打つ作業の方が抵抗なく取り組むことができた。
- ・スピーチ練習を始めると、原稿に鉛筆で言葉を足すなどしているが、手書きと印刷された文章とが混ざらず見やすい。



スライド資料作成 (Googleスライド)

《指導の工夫》

- ・情報をしぼることを意識させる。
- ・スライドの枚数や内容を限定する。(スピーチメモの構成に合わせて3~4枚)
- ・スライドのポイントを具体的に挙げる。

- | |
|--------------|
| ①文字の大きさ |
| ②枠組み・アンダーライン |
| ③図表 |
| ④色分け (3色以内) |

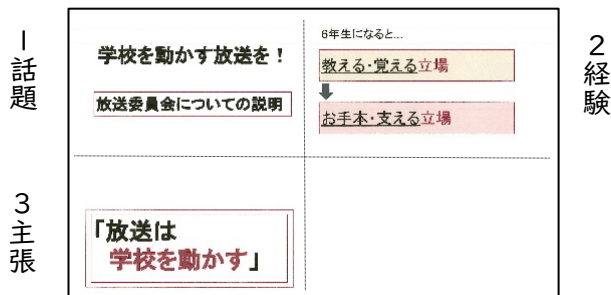
- ・教師のモデルを見せながら説明する。

《児童の様子》

スライド作成には慣れているが、情報をしぼったスライドの作成については初めて学習している。児童のスライド作成の様子から次のような特徴が見られた。

- ・文字の大きさが意識できない
→「レイアウトが変わらない中で一番大きく」と、実際に文字サイズを変更する様子を示しながら指示した。
- ・華美になりがち
→文字もラインも全て含めて3色以内におさめさせる。
→スピーチがメインのため、スライドの効果は使用しない。
- ・イラストを多用する
→図表とイラストは異なることを伝え、必要であれば、文字を大きくしたうえで最後に余白に入れる。
- ・文字が多い
→ぱっと目に入って読める程度に。

教師のモデルをもとに、情報をしぼることを理解し作成できる児童もいるが、そうでない児童も多い。文字数や色を減らしたスライド資料の良さに気づく段階には個人差がある。ある児童は、スピーチメモをそのままスライド資料として作成していたが、その後友達が作成したスライド資料と見比べ、文章からキーワードに変えていた。初めから上手く情報をしぼれなくとも、自分で気づき、納得することで、徐々に修正していく姿が見られた。



スピーチ練習（ヘッドホンマイク）

《指導の工夫》

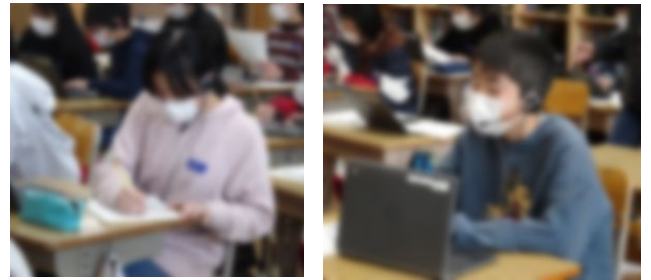
- ・教科書の動画資料をもとに、スピーチの工

夫（目線・スピード・間・強調など）に気づかせる。

- ・（個人練習）ヘッドホンマイクを使い、各自動画に撮りながら練習を繰り返す。

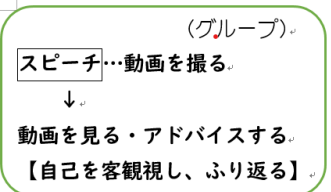
《児童の様子》

- ・（個人練習）ヘッドホンマイクをすることで、他人の声が気にならなくなることや、同室であっても自分の声しか録音されないことなどの利点があった。



【視点②】学び合いを引き起こすICT活用 《指導の工夫》

- ・（グループ練習）スピーチの様子を友達に動画で撮影してもらい、一緒に動画をふり返りながらアドバイスし合う。



《児童の様子》

- ・（グループ練習）

様子①スピーチ後「目線下がっていたよ。」と友達に言われる。動画を見てみると「ずっと下がっている。」とつぶやいていた。

「目線が下がっている」ことは自覚していたが、本人が思っている以上に長い間目線が下がっていたことに気づき、自分のイメージと実際のギャップを知ることができた。何気なく動画を見返すのではなく、動画を見る視点が友達から与えられたと言える。

様子②スピーチをした本人も「早口だったよね。」と自覚していたが、動画や表示される時間を見て改めて確認していた。「早口だった」という漠然とした指摘も、「あと〇十秒くらいあるよ。」「さっきよりはちょっと長くなっ

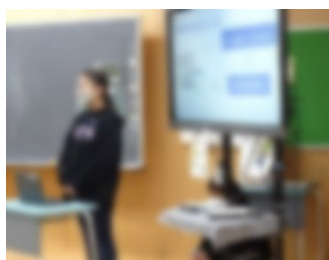
たよ。」と、時間の表示を使うことで、より具体的なアドバイスができていた。

様子③スピーチを終えるとすぐに友達が、「もう少しゆっくりの方が聞きやすいと思うな。」とアドバイスをした。その後、動画を始めから見てみる。話し手は、「声の大きさとスライドの操作ばかり意識していたから、どんどん早くなっちゃうんだよな。」と、その時の自分の様子を思い返していた。

友達のアドバイスをもとに記録をふり返ることで、原因を探ったり、「ここがちょっと」と、細かなところを指摘したりしていた。また、ICTの記録があることで、アドバイスがより具体的になったり、本人の納得につながったりしていた。

今回の実践では、「友達の気づきを視点に」スピーチ動画をふり返ることを重視していた。ある児童は、友達から指摘された通り、あまりにも下ばかり向いている自分の姿に、思わず笑ってしまっていた。ヘッドホンマイクを使った個人練習の時には見られない様子だった。友達が自分に何か言う。「ほんとだ。」と笑って答える。このような自然な関わりがあるからこそ、聞き手は自分なりの言葉で感じたことを伝え、話し手は指摘を素直な気持ちで受け取ることができる。友達の指摘に笑顔で言い訳をする様子や、話し手に向かって、熱心に伝え方を指導するような、友達ならではの関わり合いが至るところで見られた。視点を与えてチェックシートにして提示する方法もあるかと思う。与えられた視点に沿ってスピーチを見ることも必要な学習ではあるが、今回の場合、視点が決まっているような自由度の低い学習だったり、個人の練習を続けたりでは、関わりの中で上達していく活動の楽しさがなくなっていたかもしれない。

児童に課題意識があり、そこに考えの根拠になるようなICTの記録がある



からこそ、自然と学び合いになる。ただのICTの「記録」だった動画が、グループの学びを支える「教材」になっている。

(2)実践2

ア 実践の概要

(ア)单元名 第6学年 国語科

「詩を朗読してしょうかいしよう」

(光村図書)

(イ)本時の目標

朗読の録音やグループのアドバイスをもとに、朗読をふり返ることを通して、自分の感じたことが伝わるように、詩を朗読することができる。(知識・技能)

(ウ)ICTの活用について

朗読の音声を録音して記録する。それを用いて自分を客観的にふり返ったり、グループでアドバイスし合ったりする。

【視点②】

イ 児童の学びの姿

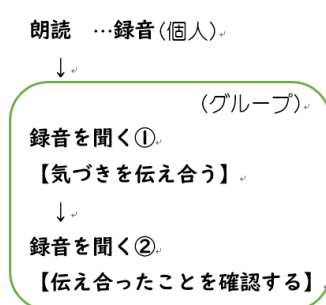
《指導の工夫》

実践1と異なり、すでに個人で録音したものを、グループで聞き合う活動を行った。

録音を聞き、気づいたことを伝え合い、それらを確認する意味合いで録音をもう一度聞いた。声の表現の工夫に着目するために、その場で実演するのではなく、録音を使い、くり返し聞くことで、友達の工夫や良さを見つけていく。

《児童の様子》

録音を聞き、グループの友達に「上手だった。」と返したあと、再度録音を聞いた。「詩と声の感じがすごく合っている。」と、上手なところを具体的に褒めていた。一度聞いて、「上手だ」としか返せなかったが、何度も聞くことで、「どこが上手なのか。」根拠を具体的に見つけて伝えることができていた。友達の発表に、具体的な感想やアドバイスを



ことは、難しいことかもしれない。上手だとは思っても、どこが上手なのか一度聞いただけで伝えられる児童は少ないと思う。ICTの記録があったおかげで繰り返し聞き、上手だったところを具体的にほめることができる。「どこが上手だったのか」という課題意識で思考を働かせながら、記録を活用している。話し手だけでなく、聞き手にとっても、ICTの記録が有効に働いていた。

学び合いには、学習の上達だけでなく、認め合いの意味も込めている。一緒に活動しながら、友達からの学びを具体的に伝え、自分や友達の学習に生かす。そこにICTの記録が役に立っていた。

5 結果と考察

(1)視点1について

スピーチメモ、スライド資料、話し方等、効果的なプレゼンテーションをするために、指導すべきことの多さを改めて感じた。

スピーチメモでは、ICTが児童の原稿を書くことへの負担感を減らしていた。また、印刷された文字に手書きで書き加えることで、児童の思考が見えやすくなった。これらの活動は、実践2にもつながり、ドキュメントで朗読の原稿を作り、手書きで朗読の表現の工夫を書き込むなどした。

スライド資料では、技能的な難しさよりも、情報をしぼったスライドの意味や良さを児童が実感することの方が難しい。始めから良いものを求めるのではなく、やってみて気づき、納得した上で修正していくことが大切だと感じた。

他教科や他学年での資料を使ったスピーチでも、今回の指導の工夫や気づきが生かさせると感じている。

(2)視点2について

「より良いスピーチにしたい」と課題意識をもつ児童にとって、友達からのアドバイスにICTの記録が加わることで、自然と学び合う姿が見られた。一人では目を止めることなく見ていたかもしれない動画を、友達と見合い伝え合

うことで、立ち止まって見ることができる。一人ではただの「記録」だったものが、友達と見合うことで、児童の思考を促す「教材」になっていた。

一方で、児童の立場としては、目の前でスピーチをしているので、動画がなくともアドバイスは言える。ICTを活用することの良さや、動画を見る必要感を児童自身が実感していれば、さらに主体的な活動になったとふり返る。今後同様のグループ活動をくり返すことで、ICTの記録をふり返る効果を児童が実感し、より一層上達や学び合いにつながっていくと考える。

(3)研究を終えての提言

国語の「話すこと・聞くこと」の学習は、音声のやり取りのために指導が難しい。学びをふり返るために、消えてしまうものを記録できるICTが、この領域で大いに活用できることを実感した。

今年度から児童全員が学習者用コンピュータを持っていることで、できることが格段に広がってきた。その一方で、一人の世界に没頭していないか。その活動が思考ではなく、個人の作業に終始していないか。指導者として授業へのICTの取り入れ方に悩む場面も増えてきた。今後は、学び合う授業をより一層意図的に仕組む必要があると感じている。児童が関わり合えるように、思考が働くように、ICTの活用の工夫を増やしていきたい。

また、今回の実践でも意識していたが、友達との交流を通して、気づきを広げたり、認め合ったりすることは、ICTが普及しても重視していきたいことである。ICTを間にはさみ、友達とのぞき込みながら思考をめぐらせている。ICTを活用している望むべき児童の姿をイメージして、今後も実践を重ねていきたい。

